早稲田大学ロシア文学会ニューズレター

2022.5.31.

Вестн №57

〒162-8644　東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学部露文コース室
TEL: 03-5286-3740
e-mail: robun@list.waseda.jp
https://www.waseda.jp/bun-russia/

- ロシア軍によるウクライナ侵攻への抗議声明
- 避難を余儀なくされたウクライナの日本語専門家への支援等
- 知りたいのは政治ではなく市民――戯曲作品 Zoom 上演とトーク――
- いま、ドストエフスキーはいかに歪曲されているか（町田航大）
- 学会だより
- 会員の新刊情報
- 『ロシア文化研究』第 29 号のご案内
- 早大ロシア文学会維持会員制度についてのお願い

ロシア軍によるウクライナ侵攻への抗議声明

2022 年 2 月 28 日

私たちは、ロシア政府によるウクライナへの軍事侵攻を強く非難します。

私たちは、あらゆる国の文化や歴史に敬意をもって研究に臨む人文学の徒です。市民生活を無造作に破壊する国家による暴力には断固として反対します。この事態のために亡くなられた方々、被害を受けている方々の哀しみに深く思いを致します。私たちは、この軍事侵攻に抗するウクライナとロシア、全世界の人々との連帯を表明します。

文学研究科ロシア語ロシア文化コース
文学部ロシア語ロシア文学コース
スタッフ一同

※2022 年 2 月 28 日　早稲田大学 文学部ロシア語ロシア文学コース／大学院文学研究科ロシア語ロシア文化コース／早稲田大学ロシア文学会 ホームページ掲載（https://www.waseda.jp/bun-russia/?p=368）

【編集部から】ロシア軍によるウクライナ侵攻後、露文専修・コースの学生や院生、さらには卒業生のあいだには、激しい憤りと、また当惑のなかで、なにか行動を起こさなければという考えが広まっています。その行動のあり方は、直接に困っているウクライナの人びとへ手をさし伸べる活動から、創作・研究活動とさまざまですが、本号では、編集部に寄せられた情報のなかから卒業生の活動を２件、それから修士課程の大学院生による論文を１件紹介・掲載します。

避難を余儀なくされたウクライナの日本語専門家への支援等

（1998 年露文卒業　野口久美子さん）

ロシアのウクライナ侵攻後、ウクライナ支援の一環として、ヨーロッパに避難中のウクライナ人の日本語通訳者や翻訳家に日本から仕事をあっせんするサービスを開始しました。

彼らは自分の日本語能力を、避難先の公用語が出来なければ日本語通訳者として使うことが出来ません。知日のウクライナ人が日本と関われなくなるのは大変残念だと思い、プロジェクトを始めました。https://jprus-ip.com/news/post2471.html

たまたま、4 月に東京新聞でこの取り組みを紹介して頂きました。新聞のデータを添付させて頂きますので、御高覧頂けましたら幸甚に存じます。

東京新聞記事：https://www.tokyo-np.co.jp/article/170310
https://www.tokyo-np.co.jp/article/173691?rct=ukraine

知りたいのは政治ではなく市民
――戯曲作品 Zoom 上演とトーク――

（1998 年露文卒業　山口健志さん）

チェーホフが好きという理由で露文科に進み、現在は戯曲家相馬杜宇（あいばもりたか）として活躍中の山口さん。ウクライナ情勢についてなぜ今のような事が起きたのかを専門の先生に話を聞き、それを知ることで戯曲化し、朗読したらどうだろうかという企画で、伊東一郎先生に取材、下記 YouTube 後半のトークでは、伊東先生のお元気な姿も見られます。［編集部］

https://youtu.be/ryTn5bKh7aw

いま、ドストエフスキーはいかに歪曲されているか

修士課程 3 年　町田航大

ロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻は世界中に恐怖と衝撃を与えている。この戦争のショックとロシア政府に対する憤りによって、本来は文化的に密接した関係にあるウクライナとロシアのあいだが安易な対立図式を用いることで分断されるという事態が生じている。これに対し日本のロシア文化研究者は、こうした、分断を助長する動きがロシア文化に対する見方にも悪影響を及ぼすのではないかという懸念を表明している。

ドストエフスキー作品を研究する一大学院生として、筆者も同様の問題意識から調査を行ったところ、このようなウクライナとロシアの対立・分断を生もうとする考え方や言説が、ドストエフスキーの言葉の解釈という領域にも入り込んでいる事例を確認した。それは、ドストエフスキーが自身の個人雑誌『作家の日記』（1876-1877）のなかで 19 世紀のロシアや西欧、スラヴ民

族に関して当時発した言葉が、2014 年のクリミア併合から現在に至る状況のなかで、ウクライナ、ロシア双方の一部メディアによって恣意的に切り取られ、両国の対立を煽る目的で利用されているという現象である。

本稿ではそうした事例を紹介しつつ、ドストエフスキーの紡いだ、本来複雑な意味を持つ言葉が戦争のもたらす混乱のなかで単純化して解釈される現象について、なぜそれが問題なのかを報告する。そのような事態は作家や文学にとって、深刻な危機にさらされる問題なのである。その上で、ロシア文学を研究する立場からこうした危機に対して今後どのように対応していくべきかを考えてみたい。

（本稿で紹介する事例はあくまでも一部の現象であり、ウクライナ、ロシアそれぞれの研究者や読者のドストエフスキー理解を代表するものではありません。また本稿で言及する個々の事例のソースや詳細等については、本稿末尾の【参考資料等】を参照してください。）

ウクライナでの事例―ロシア人への中傷に利用、ドストエフスキーの「ウクライナ化」

ドストエフスキー研究において大変有益なウェブサイトに、「フョードル・ドストエフスキー生涯と創作のアンソロジー」という、ドストエフスキー作品の生前に刊行された版や研究文献等の豊富な資料を PDF で掲載しているロシア語のサイトがある。運営者セルゲイ・ルブリョフ氏は研究者ではなくジャーナリストであり、このサイトの作成が高く評価され、2016 年にロシア・ジャーナリスト同盟から賞を授与されている。

ロシア軍によるウクライナ侵攻の開始直後、ルブリョフ氏はサイト上の「お知らせ」内で、「ウクライナが仕掛けた情報戦」に対する非難と注意喚起を発した。彼の主張によれば、ロシアがクリミアを併合した 2014 年前後から、ウクライナのマスメディアはロシア人を中傷する目的でドストエフスキーを不当に利用してきたという。その具体例として、彼は以下の二つの事例を取り上げている。

まず 2014 年 8 月 15 日、ウクライナの Gazeta.ua というメディアが「ロシア人について　ドストエフスキー：『気晴らしのために破壊できるものを探している民族』」というタイトルの記事を掲載した。この記事は、「ロシアの作家フョードル・ドストエフスキーが自身の『作家の日記』のなかで、ロシア人について何と言っているかをお伝えしよう」と前置きを述べた後、『作家の日記』1876 年 6 月号に掲載された「私の逆説」という評論を一部引用し、解説や注釈を付けずそのまま掲載している。引用された言葉は次のようなものである。

【引用 1】

> ロシア人は西欧で愛されていない、と私は言った。愛されていないこと――これについては誰も異論はないと思われるが、ついでに言うと、西欧において我々ロシア人はみな、ほとんど一人残らず、恐ろしいリベラルであり、さらには革命家であるとされており、「ロシア人は常にある種の愛情さえ抱いて、西欧の保守派よりはむしろ破壊的分子に加わる性向を持っている」と非難されている。
>
> このために、多くの西欧人は我々を嘲笑するように上から目線で――憎々しげに見つめている。西欧人には、なぜロシア人が自分と無関係な事柄においてその否定者となる必要があるのか理解できず、彼らは我々から西欧的な否定する権利を決定的に取り上げようとしている。こうしたことは、我々が「文明」に属していると認められていないこ

とが理由となっている。

むしろ西欧人は我々のことを、西欧中をぶらつき歩いて、どこだろうと何でもいいから破壊できることを喜ぶような野蛮人――粗野なタタール軍のごとく、また、自分がどれほど貴重なものを撲滅しているのかさえ全く理解せず、古代ローマに押し寄せて聖物を破壊する準備をととのえたフン族のごとく、単なる破壊のため、攻撃したものすべてが崩落する様をただ一瞥するという快楽のために破壊できることを喜ぶ野蛮人――とみなしているのだ。

ドストエフスキーは、「ロシア人の皮を剥ぐとタタール人が出てくる」という有名な警句に代表される、西欧人が抱くロシア人への偏見を繰り返し批判していた。この引用箇所も同様に、ロシア人に対する西欧人の差別的な見方を説明したものである。

しかし、Gazeta.ua の記事のタイトルと前置きは、まるでドストエフスキー自身がロシア人を野蛮な破壊者と評していたかのような印象を読者に与え、読者を誤解に導いてしまうような書き方になっている。この、作者の意図の恣意的な曲解をルブリョフ氏は非難し、ロシアの著名なドストエフスキー研究者ボリス・チホミーロフ氏の次のようなコメントを紹介している。

ヒトラーのプロパガンダがこれと似た調子で行われ、これと同じようなやり口でドストエフスキーの著作から抜き書きしたビラを、ソビエト軍の駐屯地の上にばら撒いたことは注目に値する。この作家の孫であり、戦争の最初の数日間から 1945 年の満州戦略攻撃作戦の遂行まで出征軍人として勤め上げたアンドレイ・フョードロヴィチは、このビラのせいで、祖父の発言について自分に非難を浴びせてきた同じ連隊の仲間と殴り合いの喧嘩をする羽目になったものだった。

一方で、ルブリョフ氏によって、ウクライナのメディアの報道が「ヒトラーのプロパガンダ」と重ねて理解されていることは興味深い。すでにこの時点で、ウクライナを「ネオナチ」が支配しているという現在のロシア政府の主張と相通じる発想が、ドストエフスキーとのかかわりにおいても存在していたことがうかがえることは指摘しておかなくてはならない。

次にルブリョフ氏は、2014 年 8 月 28 日にウクライナ唯一の国営通信社「ウクルインフォルム」のサイトに掲載された、ソ連時代の反体制運動の著名な活動家ウラジーミル・ブコフスキー氏へのインタビュー記事を問題にしている。この記事のなかでは、「正教徒であると自認するロシア人が、なぜクリミア併合を聖戦とみなして正当化できるのか」という旨のインタビュアーの疑問に対し、ブコフスキー氏が次のように回答している。

しかし、あなたはなぜ彼らを正教徒だと言うのですか？　彼らは正教徒のふりをしているだけです、十字架を担いでね。

わが国ロシアでは、宗教に対する態度は複雑なものです。すでにドストエフスキーが『作家の日記』のなかでこう結論づけています。「ロシア人は神を孕める民だと言われている。たしかに、彼らは宗教的な人びとだ。彼らは、人を斧で切り殺す前に必ず十字を切るものだ」と。これは、懲役を体験したドストエフスキーによる診断です。彼は自分が語る事柄についてよく知っています。人を斧で切り殺す前に十字を切る――これが、ロシア人が正教から学んだことのすべてなのです。

この回答についてルブリョフ氏は、ブコフスキー氏が、ドストエフスキーの小説の登場人物が発

した台詞を作者自身の発言と混同していると非難している。その非難の口調はあまりに過激で、読み手を困惑させる面があるものの、実際、『作家の日記』のなかにドストエフスキーの上記のような発言はなく、このルブリョフ氏の指摘そのものは正しい。まず、ロシア人を「神を孕める民」と評する言葉は、長編小説『悪霊』の第 2 部第 1 章第 7 節におけるシャートフとスタヴローギンの会話の場面で、シャートフが「新たな神の名のもとに世界を救う」というロシア民族のメシア的使命を声高に語る際に口にしたものである。また、「人を斧で切り殺す前に十字を切る」という表現は、長編小説『白痴』の第 2 部第 4 章でムイシュキンが信仰に関する小話としてロゴージンに物語った、「友人が所持していた銀時計が欲しいあまり、十字を切って神に赦しを乞うた後、友人を刺殺して時計を奪った農民」のエピソードに由来すると思われる。これらのいずれも、ドストエフスキーが完全に自分の意見として発した言葉ではなく、むしろそれぞれの作中の場面において、ある種の不可解な言説や言動として描かれている。

したがって、このブコフスキー氏の発言とされるものは、ドストエフスキー作品の人物の台詞を雑に組み合わせて差別的なロシア人イメージを作り出しつつ、あたかもそれがドストエフスキーの見解に依拠しているかのように示すことで、ロシア人全体を誹謗中傷する言説を正当化してしまっているように見える。

ルブリョフ氏は、このような、過去に起きたドストエフスキーの言葉の恣意的な伝達の仕方が、現在の状況のなかで再度生じていると警鐘を鳴らす。それは、このウクライナによる「情報戦」に惑わされて「ゼレンスキーやバイデンというろくでなし」の仲間にならないようにという、サイトの読者への激しい調子の呼びかけにつながっている。

またルブリョフ氏は取り上げていないものの、こうしたロシア人への中傷と結びついた歪曲と関連して、ウクライナではドストエフスキーを逆に「ウクライナ人作家」として純化しようとする動きも見られる。たとえば 2016 年 12 月、元ウクライナ大統領のユーシチェンコ氏がキエフ大学の学生向けの講演で、イリヤ・レーピン、チャイコフスキーと並べてドストエフスキーを「ウクライナ民族文化における傑出した活動家」と表現し、「ドストエフスキーはウクライナの作家だ」と発言したことが波紋を広げた。またドストエフスキー生誕 200 周年を記念する 2021 年 11 月 11 日には、米国議会が出資している報道機関「ラジオ・リバティー」（欧州自由放送）のウクライナ支部のサイトに、「ドストエフスキーのウクライナ・ルーツ」を報じる記事が掲載された。その記事のなかでは、ドストエフスキーが自らの創作によって表現した宗教性はロシア的なものとは関係が希薄であり、ウクライナの宗教性の方に由来しているという見解が示されている。

たしかに、祖父がウクライナの村司祭で、父親もウクライナ出身であったため、ドストエフスキーにはウクライナと伝記上のつながりはあり、彼の創作におけるウクライナ的要素を発掘する試み自体は研究上の実りあるアプローチとなりうる。しかし、ドストエフスキーはロシアの民衆の多様な性格を分析し、聖者伝などのロシアの宗教文化に深く学び、ロシアの将来に関する自己のヴィジョンを力強く表現していた。そのため、彼の創作からロシア的なものを取り除き、彼をウクライナの民族性という枠組みに入れ込もうとすれば、この作家の人物像と創作をともに歪めることになってしまうだろう。

以上の事例は、ウクライナとロシアの分断を生むために、ドストエフスキーをロシア人への中傷のために恣意的に用いて、彼をウクライナの側へ引き入れる試みと考えられる。

ロシアでの事例――謙虚さの意義を説いたドストエフスキーの評論を曲解

ウクライナでのドストエフスキー利用を強い言葉で非難したルブリョフ氏だが、一方で彼のドストエフスキーの引用の仕方にも重大な問題がある。

ルブリョフ氏は、ロシアを取り巻く現在の国際情勢をよく説明しうるドストエフスキーの言葉として、同じく『作家の日記』のうち、1877 年 11 月号第 2 章第 3 節の「ずいぶん前からしたいと思っていた、スラヴ人たちに関する本当にとっておきの話」という、ユニークなタイトルの付いた評論を取り上げている。これは、バルカン半島のスラヴ諸民族をオスマン帝国の支配から救い出すという名目で、ロシアがオスマン帝国に宣戦した露土戦争（1877-1878）の最中に書かれたものであり、ロシアがこのスラヴ人たちを解放した先の未来を想定して、どのように事態が展開するかを論じたものである。

このドストエフスキーの評論のうち、ルブリョフ氏が自身のサイト上で取り上げている部分は、以下のような一見センセーショナルな発言から始まっている。

【引用 2】

> 私の胸の内を占める最も完全かつ克服しがたい確信によれば――これらのスラヴ民族はみな、ロシアが彼らを解放し、一方で西欧がその解放された事実を認めることに同意するやいなや、過去にも将来にも考えられないほどのロシアの憎悪者、羨望者、中傷者、さらには露骨な敵となるだろう！

ルブリョフ氏はこの発言をサイトの読者に示した上で、この言葉の後に続いて展開されるドストエフスキーの主張から非常に長い引用を行っている。その引用部分全体を本稿で示すことは難しいため、筆者による要約のかたちで示してみると、およそ次のようになる――ロシアはスラヴ人たちに感謝を要求してはならない。解放後のスラヴ諸民族はたちまちロシアの領土的野心を警戒し、西欧に保護を求めるだろう。彼らは、自分たちはロシアに何も感謝する必要はなく、むしろ西欧列強の介入がなければ自分たちはロシア民族に吸収されてしまうところだったと自らに言い聞かせ、今後百年以上にわたってロシアを中傷し、ロシアについてのデマを流す。そして、「自分たちは西欧の高度な文化を理解できる教養ある民族であるのに対し、ロシアは野蛮な国であり、西欧文明の迫害者、憎悪者である」という考えに酔いしれ、自己の人格を喪失するに至るまで政治や文化の西欧化を進めてしまう。深刻な危機が生じた時にはじめて、彼らは自分たちにとってのロシアの重要性に気づくことになるが、それまでの長い間、ロシアはこうしたスラヴ人たちの反ロシア的行動と向き合い続けなければならない――ルブリョフ氏によって引用された部分は、ここで終わっている。

この評論自体はウクライナについて書かれたものではないが、独立した後に西欧に接近してロシアを憎悪、中傷するという、上記の引用部分におけるスラヴ人についての説明が、現代のウクライナの動向にそのまま当てはまるものとロシア国内で理解されてきたらしい。ルブリョフ氏が 2014 年 9 月 8 日に保守系サイト「ルースカヤ・イデア」に寄稿した記事「ウクライナでの事件に照らしたドストエフスキーと情報戦」によると、クリミア危機の前後から、ドストエフスキーのこの評論はロシア政府の機関紙「ロシースカヤ・ガゼータ」も含めたほぼすべてのメディアによって引用されたという。今回の侵攻直後も、ルブリョフ氏は「これを引用していないのは怠け者だけだ」として、上述の引用箇所が持つアクチュアルな意義を強調し、ウクライナを非難する

ために用いている。また右翼系メディアのなかには、「ドストエフスキーの予言が成就した」という露骨なタイトルの記事を掲載し、この引用箇所を率直にウクライナ情勢と結びつけて読者に提示したものもある。

しかし、このような引用の仕方で、ドストエフスキーのこの評論を現在のウクライナ政府に対する非難とロシアの軍事介入の正当化のために用いることは、この作家が実際に発していたメッセージを覆い隠すことになってしまうのではないだろうか。

まず、バルカン半島のスラヴ諸民族に関する上記の主張は、「西欧になびいた恩知らずのスラヴ人たち」を非難する意図のものではなく、逆にスラヴ人たちに当たり前に感謝や恭順を要求する当時のロシアの世論に反対する文脈で発せられたものだった。引用される箇所は『作家の日記』1877 年 11 月号第 2 章の第 3 節であり、前の第 1 節、第 2 節と話が連続している。その第 2 節でドストエフスキーは、ロシア軍がオスマン帝国領であったブルガリアに進出した際、ブルガリア人から解放者として歓待されず、むしろ疑いの目で見られたという報道が国内の知識人を憤慨させた事実を取り上げ、同胞たるブルガリア人の無事を喜ぶよりも、同胞から主人のごとく感謝を要求するその態度を批判している。「スラヴ人たちに感謝を要求してはならない」という引用箇所に見られる発言も、この第 2 節の主旨との連続において理解する必要がある。そもそもルブリョフ氏が引用した箇所のなかでも、ドストエフスキーは、ロシアに対する中傷などの将来予想される行為は「スラヴ民族の卑劣で恩知らずな性格」とやらに由来するものでは決してなく、ある種の不可避的な事象であるとあらかじめ断っている。

また、オスマン帝国から解放された後のスラヴ諸民族への対応について、ドストエフスキーはロシアが軍事的・政治的圧力を行使してスラヴ人たちを服従させることには賛同していなかった。実は、同じ評論のなかでドストエフスキーは、むしろスラヴ人たちに完全な政治的自由を与え、彼らに対するロシアの後見と政治的影響を自ら放棄し、ロシアの「政治的無欲」を百年以上にわたって示し続けることこそが、ロシアとスラヴ民族の自発的な団結を将来的に実現すると主張していた。ここで、ドストエフスキーは「無欲」を示すというロシアの課題を繰り返し強調し、領土拡大などの利益をあえて損なうような行動が、最終的にはロシアの国益となるという逆説を展開している。そして、ロシアのあるべき姿について次のような言葉でまとめている。

【引用 3】（注：下線は筆者による）

> またしてもこんな疑問が聞こえてくる。「結局、こうしたことはすべて何ゆえに起こるのだ、なぜロシアがそのような気苦労をしなければならないのだ？」と。何のためかというと、それは、至高の生を、偉大な生を生きるためであり、世界を偉大な、打算なき清純な理念で輝かせ、最終的には諸民族の兄弟的結合という偉大かつ強力な有機体を実現し創造するためであり、この有機体の創造を、政治的圧力や剣によってではなく、説得、模範の提示、愛情、無欲および光によって成し遂げるためである。そして、終局的にはこれらの小さき者たちすべてを自分と同じところまで引き上げ、ロシアが果たす母親的使命を彼らに理解させること――これこそがロシアの目的であり、お望みならば、ロシアの利益と言ってもかまわない。もし諸国民が、至高の打算なき理念と、人類に対する奉仕という至高の目的とによって生きることをせず、単に自己の「損得」にのみ仕えるならば、これら諸国民は疑いなく破滅してしまう――硬直し、力を失い、死に至るであろう。打算なしにスラヴ人たちに奉仕して彼らから感謝を求めず、彼らが道徳的に（政治的なものだけは除いて）再び結合して偉大なる統一をなすことに奉仕しながら、

ロシアが自らに課すであろうこの目的よりも、高尚な目的はない。

ここに見られる「諸民族の兄弟的結合」や「自分と同じところまで引き上げる」といった言葉は、たしかに汎スラヴ主義という言葉を連想させるような危うさや、スラヴ人たちに対するロシアの上からの目線を感じさせるため、現代の価値観からすれば素直に受け入れることは難しい。それでも、ドストエフスキーがここで政治的・軍事的圧力による解決を否定し、あくまでもロシアが謙虚さを示すことを重視していたことは注目されるべきだろう。

ところが、「政治的無欲」を示すべきという言葉も、この最も重要な結論に当たる箇所も、ルブリョフ氏やロシア政府の機関紙「ロシースカヤ・ガゼータ」は引用していない。ドストエフスキーの評論の要点を曖昧にし、「ロシアの憎悪者、羨望者、中傷者」といった引用箇所の冒頭に代表されるショッキングな言葉が前景化されるように提示することで、彼らはウクライナに対するロシア人の反感を煽っているように感じられる。

第三者の立場から検証・批判する必要性

このように、両国の対立と分断を煽る目的で、ウクライナ、ロシア双方のメディアにおいてドストエフスキーの言葉を恣意的に切り取り伝達する事態が生じている。こうした現象はそれぞれの国のドストエフスキー理解を代表するものでは決してないものの、戦争勃発のショックに乗じて、このような恣意的なドストエフスキー利用が今後広まっていくリスクは高まっているのではないだろうか。特にロシアでは、本稿で紹介した事例とは別に、プーチンや側近がすでに今回の「特別軍事作戦」に際してドストエフスキーの名を政治利用する姿勢を見せており、侵攻を正当化するためのドストエフスキー利用にロシア国内で公然と異議を唱えることは今後難しくなるかもしれない。

戦争の恐怖と混乱が引き起こすこのような言葉の歪曲に対処するためには、比較的冷静になれる立場の人びとが、本稿で取り上げたような現象を客観的に検証・批判しつつ、『作家の日記』を含めたドストエフスキーの言葉について、具体的な歴史的文脈をふまえた慎重な研究を継続していくことが求められるだろう。

しかし残念なことに、これと相反するような動きがすでに見られる。アメリカのドストエフスキー研究者の団体である北米ドストエフスキー協会は、侵攻から早くも四日後の 2 月 28 日に、今回のロシアによる軍事侵攻に関して以下の声明を出している。

> ドストエフスキー作品の研究者および教師として、我々はウクライナに対するロシアの正当な理由なき侵略を、恐怖を抱きつつ注視している。ドストエフスキー作品を読んだことのある者なら誰でも知っているように、彼の見解は矛盾を孕んでおり、またいくつかの場合には、外国人恐怖症的である。一方では、ドストエフスキーは全世界的友愛という自らのヴィジョンと、「美は世界を救う」という理念を前に押し進めているものの、他方では、彼は汎スラヴ主義の名のもとに戦争を擁護するロシアの熱狂的な民族主義者であった。ドストエフスキー研究者として、我々は彼が提唱した理念のうち、世界文化を豊かにし、かつ照らし出すようなものを発展させる一方で、同時に、憎悪や殺戮を下支えするような彼の見解について、当時の文脈のなかで検討しつつ批判することに対する自らの責任を自覚している。ドストエフスキーが特に自身のジャーナリストとしての活動のなかで理論化したものと同一の民族主義と帝国主義が、現在進行中の侵略およびそのイデオロギー的基礎に深く関与している。我々はロシアのウクライナ侵略を非

難し、この侵略に反対の声を上げるウクライナ、ロシアおよび世界中のすべての人びとと連帯する。この暴力にショックを受けている我々の仲間、学生、友人および家族に対して、我々は深く思いを致す。

この声明は、「外国人恐怖症」や「汎スラヴ主義」、「民族主義者」、「帝国主義」といった煽動的な用語を十分な解説もせずにドストエフスキーの説明に適用し、ドストエフスキーが何らかの「民族主義と帝国主義」を理論化していたとみなした上で、その理論が「現在進行中の侵略およびそのイデオロギー的基礎に深く関与している」と断定している。北米協会がこうした見解を出したのは、『作家の日記』のなかにドストエフスキーが戦争を讃美していたかのように見える文面も一部含まれることや、前述のようにプーチンやロシアの右翼などがドストエフスキーを実際に利用しているといったことが念頭にあるためかもしれない。

しかし本稿で示したように、ドストエフスキーの評論の言葉は、前後の文脈や時代背景、さらには逆説を駆使して持論を展開するレトリックなどを丁寧にふまえて読まないと、作者の発言の趣旨を大きく取り違えてしまうリスクの高い文章であり、本来きわめて慎重に扱わなければならない性質のものである。そのため、ドストエフスキーの言葉の曲解に対処するという点で言えば、この作家と現在の戦争のあいだの結びつきとされる側面について短い文章で概括するよりも、むしろドストエフスキーの言葉を解釈すること自体の難しさを強調し、恣意的に作家の言葉を利用する立場とは異なる、テクストを誠実に読む研究者の姿勢を明確に打ち出す方が好ましいのではないだろうか。また、読み方次第で、北米協会がドストエフスキーの思想をロシア政府のイデオロギーと同一視しているようにも解釈されかねない声明を出すことは、両者の本質的な差異を見えにくくしてしまうおそれがある。

なお、ルブリョフ氏はこの声明に激しく反発し、ロシアの研究者たちに対して「北米協会との永久的断絶をすべきだ」と訴えている。彼は研究者ではないため、この過激な主張がロシアと北米の研究上の交流に実際的影響を及ぼすことはないと思われる。だが、プロの研究者が所属する団体が今後もこうした危うい言葉を発してしまえば、本稿で示したような、分断を生み出す目的でなされるドストエフスキーの歪曲に、対話を通して歯止めをかけることはいっそう困難になるだろう。

現代の国際情勢に過去の作家の言葉を安易に当てはめることも、「民族主義者」などの単純かつセンセーショナルな定義づけを作家に対して行うことも、作家が自分の生きた時代との対話のなかで生み出した複雑な言葉を単純化するリスクを負っている。こうしたことに対処するためには、表面的な解釈を受けやすい『作家の日記』の個々の文章について、当時の歴史的・社会的コンテクストと照らし合わせて、作者の細かい言い回しやレトリックにも注意を払いながら、一語一語丁寧に精読し直すことが必要だろう。そのようにしてドストエフスキー自身の肉声に真摯に耳を傾けることが、本当の意味で、現代におけるこの作家のアクチュアリティを考えることにつながると思う。

【編集部注】

本稿末尾にあるように、ルブリョフ氏やロシアの主要メディアによって『作家の日記』から引用されている評論文の、町田氏による全訳を、別途、露文コース室のホームページ（下記）に掲載しています。とくにその最後に附された「翻訳後記」は、本稿の続篇として読まれるべきものと思います。ぜひご参照ください。（源）

https://www.waseda.jp/bun-russia/wp/wp-content/uploads/2022/20220523
露文コース室ホームページ（https://www.waseda.jp/bun-russia/）⇒「お知らせ」⇒「『作家の日記』《とっておきの話》全訳」

【参考資料等】

〇日本のロシア文化研究者による懸念表明について
・日本ロシア文学会 HP の「ウクライナ情勢関連情報」の内、「学術界の反応」を参照。https://yaar.jpn.org/

〇セルゲイ・ルブリョフ氏のウェブサイト
Федор Михайлович Достоевский: Антология жизни и творчества. https://fedordostoevsky.ru/
・ウクライナ侵攻後に彼が発した注意喚起とウクライナへの非難は、2022 年 2 月 27 日および同年 3 月 4 日の「お知らせ Новости」を参照。
・彼が取り上げている、ウクライナのマスメディアによるドストエフスキーの歪曲の事例の詳細については、サイト内の「研究 Исследования」欄の「偽ドストエフスキー Лже-Достоевский」という項目を参照。

〇ウクライナでの事例のソース
・Gazeta.ua の該当記事
Достоевский о русских: «Народ, который ищет, что можно разрушить ради развлечения» // Gazeta.ua. пятница, 15 августа 2014. https://gazeta.ua/ru/
・「ウクルインフォルム」の該当記事
Лана Самохвалова. Владимир Буковский: «Я готов приехать и обучить Порошенко посылать Путина. У меня хороший опыт» // Укринформ. Новость. 28 августа 2014. Новости Укринформ (ukrinform.ru)
・ウクライナ元大統領のユーシチェンコ氏による「ウクライナの作家」発言について
Ющенко назвал Достоевского представителем "украинской цивилизации" // РИА НОВОСТИ. 28 декабря 2016. https://ria.ru/20161227/1484757355.html
・ドストエフスキー生誕 200 周年にあたる 2021 年 11 月 11 日に、「ラジオ・リバティー」（欧州自由放送）ウクライナ支部のサイトに掲載された記事
Петро Кралюк. 200-літній ювілей. Українські корені Федора Достоєвського та «елліністична поезія» України // Радіо Свобода. 11 листопада. 2021. https://www.radiosvoboda.org/a/pysmennyk-fedir-dostoyevsky-i-ukrayina/31046457.html

〇ロシアでの事例のソース
・ルブリョフ氏が 2014 年 9 月 8 日に保守系サイト「ルースカヤ・イデア」に寄稿した記事「ウクライナでの事件に照らしたドストエフスキーと情報戦」
Рублев С. Достоевский и информационные войны в свете украинских событий // Русская Idea: Сайт консервативной политической мысли. Блоги, прогнозы. 8 сентября 2014. https://politconservatism.ru/
・ロシア政府の機関紙「ロシースカヤ・ガゼータ」の該当記事
Глазами Достоевского // Российская Газета. Неделя № 275 (6251). 5 декабря 2013. https://rg.ru/2013/12/05/dostoevky.html
・侵攻後、ロシアの右翼系メディアがドストエフスキーの言葉を予言扱いしている例
Егор Шилов. Пророчество Достоевского по Украине сбылось: «Будут заискивать перед Европой и клеветать». Гоголь, кстати, был солидарен — и дал рецепт примирения // #Ваши новости. 25 февраля. 2022. https://vnnews.ru/prorochestvo-dostoevskogo-po-ukraine/
・その他、ロシアの検索エンジン「ヤンデックス Яндекс」で「Достоевский Украина」等と検索すると、本稿で取り上げた事例と同様の意図で『作家の日記』1877 年 11 月号第 2 章第 3 節から引用している記事が多数ヒットする。https://yandex.ru/

・侵攻後、プーチン大統領が「ルソフォビア被害」の象徴としてドストエフスキーに言及
https://fedordostoevsky.ru/news/2022/022/
・ロシア政府の対外情報庁長官ナルイシキンが『作家の日記』を引用して軍事作戦を正当化
https://fedordostoevsky.ru/news/2022/021/

〇北米ドストエフスキー協会の声明
"North American Dostoevsky Society Executive Board Statement in Support of Ukraine," *Bloggers Karamazov: The Official Blog of The North American Dostoevsky Society*, Feb. 28, 2022. https://bloggerskaramazov.com/

『作家の日記』について

・小説作品と比べると『作家の日記』は一般知名度が低く、翻訳も入手しづらいが、単行本形式でのまとまった邦訳としては以下の二つが挙げられる。
ドストエーフスキイ（米川正夫訳）『作家の日記』（全六巻）岩波文庫、1959 年。
ドストエフスキー（小沼文彦訳）『作家の日記』（全六巻）ちくま学芸文庫、1997-1998 年。
・近年の『作家の日記』の優れた専門的研究としては以下の二つの文献が挙げられる。
Волгин И. Ничей современник. Четыре круга Достоевского. М.; СПб.: Нестор-История, 2019.
著名な歴史家・ロシア文学研究者のイーゴリ・ヴォルギン氏が、豊富な一次資料をもとに、ドストエフスキーの創作活動を当時の歴史的文脈に位置づけて詳細に論じた大部の著作。本書の第一部で、『作家の日記』自体のジャンル上の独自性や創作の背景、同時代の様々な立場の人びとからの反響など、この作品を知るために必要な情報が数多く提示されている。ヴォルギン氏は、戦争やスラヴ問題をめぐるドストエフスキーの見解が、当時の皇帝アレクサンドル 2 世や保守派の主張と相違していたことを資料にもとづいて説得的に示しつつ、ドストエフスキーをツァーリズムに同調した反動保守とみなす古くからの偏見を批判しており、本稿で論じた作家の言葉の歪曲という問題を考える上で多くの示唆を与えてくれる。
Достоевский и журнализм / Под. ред. В. Н. Захарова, К. А. Степаняна, Б. Н. Тихомирова. СПб.: ДМИТРИЙ БУЛАНИН, 2013.
2013 年 7 月にモスクワで開催された第 15 回国際ドストエフスキー・シンポジウムにおける、「ドストエフスキーとジャーナリズム」を主題とする様々な研究報告をまとめた論集。本論集に所収の各論文には、「作家」と「評論家」というドストエフスキーの二つの側面を矛盾・対立したものとみなす従来の一面的な見方を批判し、彼の評論における詩学やレトリックの検討を通じて、この作家のなかで小説と評論が有機的一体をなしていることを論証するという問題意識が見られる。
・ロシアにおける『作家の日記』研究の歴史とトレンドについては以下の論文に詳しい。
Борисова В. В. «Дневник писателя» Ф. М. Достоевского в фокусе современных интерпретаций // Идеи и идеалы. 2016. № 2(28). Т. 1. С. 128–136. https://cyberleninka.ru/journal/n/idei-i-idealy?i=1023170

〇その他の補足事項
・ウクライナにおけるドストエフスキー研究の伝統については以下の論文に詳しい。
Романов Ю. А. Творчество Ф. М. Достоевского в трудах украинских литературоведов // Вопросы русской литературы. № 21(78). 2012. С. 9–39. https://cyberleninka.ru/article/n/tvorchestvo-f-m-dostoevskogo-v-trudah-ukrainskih-literaturovedov
この論文を読むと、「クリミア」がドストエフスキーの歴史観に与えた影響や、ドストエフスキーと近代ウクライナ語文学の祖タラス・シェフチェンコの間に見られる伝記上の類似性（監獄体験や軍務）、イワン・フランコなどの代表的なウクライナ語作家によるドストエフスキー作品の受容の特質など、ウクライナならではの興味深い主題が盛んに研究されていることが分かる。

〇本文中のドストエフスキーの引用の原文
・本稿におけるドストエフスキー『作家の日記』（1876-1877）からの引用は、ロシア科学アカデミーロシア文学研究所（プーシキンスキー・ドーム）が刊行した全 30 巻の全集（*Достоевский Ф. М.* Полное собрание сочинений: В 30 т. Л.: Наука,

1972–1990）にもとづいている。以下の原文の末尾には括弧を付け、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で示す。引用の訳文はすべて筆者の拙訳により、上述の米川正夫訳を適宜参照した。

【引用 1】（ここでの段落分けは Gazeta.ua の該当記事によるもので、原文にはない）

Я сказал, что русских не любят в Европе. Что не любят — об этом, я думаю, никто не заспорит, но, между прочим, нас обвиняют в Европе, всех русских, почти поголовно, что мы страшные либералы, мало того — революционеры и всегда, с какою-то даже любовью, наклонны примкнуть скорее к разрушительным, чем к консервативным элементам Европы.

За это смотрят на нас многие европейцы насмешливо и свысока — ненавистно: им не понятно, с чего это нам быть в чужом деле отрицателями, они положительно отнимают у нас право европейского отрицания — на том основании, что не признают нас принадлежащими к «цивилизации».

Они видят в нас скорее варваров, шатающихся по Европе и радующихся, что что-нибудь и где-нибудь можно разрушить, — разрушить лишь для разрушения, для удовольствия лишь поглядеть, как всё это развалится, подобно орде дикарей, подобно гуннам, готовым нахлынуть на древний Рим и разрушить святыню, даже без всякого понятия о том, какую драгоценность они истребляют.（XXIII, 38）

【引用 2】

…по внутреннему убеждению моему, самому полному и непреодолимому, — не будет у России, и никогда еще не было, таких ненавистников, завистников, клеветников и даже явных врагов, как все эти славянские племена, чуть только их Россия освободит, а Европа согласится признать их освобожденными! (XXVI, 78)

【引用 3】（下線は筆者による）

Опять-таки скажут: для чего это всё, наконец, и зачем брать России на себя такую заботу? Для чего: для того, чтоб жить высшею жизнью, великою жизнью, светить миру великой, бескорыстной и чистой идеей, воплотить и создать в конце концов великий и мощный организм братского союза племен, создать этот организм <u>не политическим насилием, не мечом, а убеждением, примером, любовью, бескорыстием, светом</u>; вознести наконец всех малых сих до себя и до понятия ими материнского ее призвания — вот цель России, вот и выгоды ее, если хотите. Если нации не будут жить высшими, бескорыстными идеями и высшими целями служения человечеству, а только будут служить одним своим «интересам», то погибнут эти нации несомненно, окоченеют, обессилеют и умрут. А выше целей нет, как те, которые поставит перед собой Россия, <u>служа славянам бескорыстно и не требуя от них благодарности</u>, служа их нравственному (а не политическому лишь) воссоединению в великое целое. (XXVI, 81–82)

本稿で扱った、スラヴ問題をめぐる『作家の日記』の評論の全訳

本稿の「ロシアでの事例」で、ドストエフスキー『作家の日記』1877 年 11 月号第 2 章第 3 節の評論が、ルブリョフ氏やロシアの主要メディアによって曲解されているという問題を指摘した。もっとも、彼らはこの評論中の非常に長い文章を引用しており、その引用部分全体を本稿で提示することは困難をきわめたため、本稿ではやむなく一部の引用に留め、引用箇所全体の文脈は筆者による要約で示している。しかし、ドストエフスキーがどのようなメッセージを発していたのか、またルブリョフ氏たちがそのメッセージをいかに歪めてしまっているのかを理解するためには、やはりこの評論全体を読むことが必要である。

そこで、この評論の全文の翻訳（筆者の拙訳による）を載せた PDF へのリンクを以下に添付

する（この訳文のうち、ルブリョフ氏たちが引用している部分は第二段落全体であり、一方、本稿で論じた、「政治的無欲」を示すべきというドストエフスキーの主張が展開されている部分は第四段落にあたる）。また、ここに、全訳に加えて、読解に役立てるための解説を「翻訳後記」として掲載しているので、よろしければご覧いただきたい。（町田）

https://www.waseda.jp/bun-russia/wp/wp-content/uploads/2022/20220523

露文コース室ホームページ（https://www.waseda.jp/bun-russia/）⇒「お知らせ」⇒「『作家の日記』《とっておきの話》全訳」

学会だより

○　2022 年 3 月に文学部ロシア語ロシア文学コースから 12 名が卒業しました（加えて 9 月卒業者 1 名）。文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程の修了者は 2 名でした（加えて 9 月卒業者 1 名）。博士後期課程の修了者は 1 名でした。

○　2022 年度の文学部ロシア語ロシア文学コースへの進級者は 8 名でした。文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程への入学者は 1 名、博士後期課程への入学者は 2 名でした。

○　2022 年度春季公開講演会・総会が 6 月 25 日（土）に催されます。詳しい時間・場所等につきましては、露文コース室ホームページのお知らせをご覧ください。

＊ヴェスチに情報掲載を希望される方は、編集部まで原稿をお寄せください＊

2022 年上半期会員の新刊情報（2022 年 5 月 18 日調べ）

五木寛之著『一期一会の人々』中央公論新社（2022/1）

五木寛之著『雨の日には車をみがいて』幻冬舎（2022/1）

五木寛之著『捨てない生きかた』マガジンハウス（2022/1）

五木寛之著『背進の思想』新潮社（2022/2）

五木寛之著『折れない言葉』毎日新聞出版（2022/3）

五木寛之ほか著、南陀楼綾繁編『中央線小説傑作選』中央公論新社（2022/3）

貝澤哉、杉浦秀一、下里俊行編『〈超越性〉と〈生〉との接続：近現代ロシア思想史の批判的再構築に向けて』水声社（2022/3）

桑野隆編、バーリン著『ロシア・インテリゲンツィヤの誕生　他五篇』岩波書店（2022/5）

坂庭淳史、下里俊行訳、イーゴリ・エヴラームピエフ著『ロシア哲学史：〈絶対者〉と〈人格の生〉の相克』水声社（2022/4）

坂庭淳史、中村唯史、小椋彩編『ロシア文学からの旅：交錯する人と言葉』ミネルヴァ書房（2022/5）

東海林さだお著『サクランボの丸かじり』文藝春秋（2022/4）

多和田葉子ほか著、平凡社編集部編『作家と珈琲』平凡社（2022/1）

多和田葉子、伊藤比呂美、島田雅彦、角田光代訳『にごりえ　新装版』河出書房新社（2022/4）

本田晃子著『都市を上映せよ：ソ連映画が築いたスターリニズムの建築空間』東京大学出版会（2022/1）

三浦清美『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』松籟社（2022/3）

三木卓訳、アーノルド・ローベル著『ふたりはしんゆう』文化学園文化出版局（2022/2）

三木卓文、西巻茅子絵『おおきなかぶ』講談社（2022/4）

村山久美子監修・協力、Cuvie 著『絢爛たる

グランドセーヌ=La Magnifique Grande Scène 19』秋田書店（2022/2）
村山久美子著『バレエ王国ロシアへの道』東洋書店新社（2022/3）

＊著書を上梓された会員の方は、ぜひ編集部までご一報ください＊

『ロシア文化研究』第 29 号のご案内

2021 年度の早稲田大学ロシア文学会会誌『ロシア文化研究』第 29 号が 2022 年 3 月末に刊行されました。本号をご希望の方は、「早大ロシア文学会維持会員制度についてのお願い」をご覧の上、同封の払込用紙の通信欄に「第 29 号希望」と記し、維持会費としてお振込みください（原則として、本誌は維持会員の方々にお分けしております）。

【論文】
三浦清美　ワッシアン・ルィロのウグラ川への書簡――中世ロシア文学図書館 XXIV
田中沙季　「私は町人だ」――A. B. コリツォーフの詩人としての自己認識――

【書評と紹介】
桜井厚二　ドストエフスキー著、杉里直人訳『詳注版 カラマーゾフの兄弟』（水声社　2020 年）
長縄光男　井桁貞義、伊東一郎、長與進編『スラヴァンスキイ・バザアル――ロシアの文学・演劇・歴史』（水声社　2021 年）
伊東一郎　三浦清美訳・解説『キエフ洞窟修道院聖者列伝』（松籟社　2021 年）

早大ロシア文学会維持会員制度についてのお願い

早大ロシア文学会の「維持会員制度」は、すでに多くの方々からのあたたかいご支援を頂戴しております。おかげさまで、毎年『ロシア文化研究』を発行することができております。『ロシア文化研究』発行の他にも、ニューズレター「ヴェスチ」の発行・送付、春季公開講演会の諸費用等にも、皆様より寄せられた会費が充てられております。

この制度は、会員の方々から広く「維持会員」を募り、維持会員になって頂いた方には、その年度の『ロシア文化研究』を年度末の発行に際して 1 冊お送りするという制度です。学会誌・ニューズレターの発行、講演会の諸費用等は大学からの補助だけではまかないきれません。会員の皆様には、本学会が担い続けている、日本のロシア文化研究の中心的役割をお察しのうえ、ぜひともご支援をお願い申し上げる次第です。一人でも多くの会員の方々からご支援を賜りますよう、お願いを申し上げる次第です。維持会員になっていただけます方は、以下の要領にてご送金くだされば幸いです。

(1)　年会費は 1 年につき 2,000 円となります。
(2)　維持会員費納入には、同封の郵便振替用紙をご利用ください（口座番号 00160-7-87172　加入者名　早稲田大学ロシア文学会）。差出人欄には、住所と氏名だけでなく、郵便番号と電話番号も必ずお書きください。
(3)　複数年のお振込みをいただいた方には、自動的にその年度発行分以下、『ロシア文化研究』を、発行され次第、順次、送本申し上げます。
(4)　『ロシア文化研究』は、年度末に発行されます。従いまして、前年度の『ロシア文化研究』をご希望の方は、振込用紙の通信欄に、その旨、お書き添えください。

少しでも多くの皆様のご協力とご支援を重ねてお願い申し上げます。